

イエスは4人の弟子を召し出すと、カファルナウムで汚れた霊に取りつかれている男をユダヤ教の会堂の中で癒す奇跡行為を行います。しかも、その行為は安息日に行ったものでした。ユダヤ教の会堂では礼拝をしていますし、癒しの業とはいえ、安息日ですから、なんらかの行動を起こしてはならないのです。その男に取りついた汚れた霊は自分に関わることを拒絶するのですが、イエスはその悪霊を男から追い出してしまえます。ここでの主イエスは、「権威ある新しい教え」（27節）を語られていたことが前面に出てきています。権威（エクスターシア）という言葉は、言葉の印象からするならば何か強権的で自由を束縛する力を連想する向きもあるとは思いますが、このギリシア語はエクス（くから外へ）という語と、ウーシア（あること、存在すること）とが組み合された語です。つまり、他人や力ある存在に縛られないで自由に行動できるようにすることを意味しています。イエスが悪霊を追い出した力は、この男の人を悪霊の呪縛から雌雄にして解放したわけです。ですから、この権威は権力とは関係がなく、逆に当時の権力者であった律法学者の権威とは対立的なものであることをテキストは示しています。イエスの新しい教えに人間を自由にする力があつたから、この男に取りついてた汚れた霊はイエスによって男から出て行ったのです。

権力というものは自分の都合の良いように、財力や武力によって力づくで他人を屈服させるものです。ただ、注意すべきことですが、主イエスの最初の悪霊払いの行動は、それを行った結果として周囲の人々がイエスに独特の権威があると判断したのではないことです。そうではなくて、イエスの語る「教え」に権威がすでにあつたというのです（21～22節）。安息日にはユダヤ教の会堂では礼拝が行われていました。ユダヤ教の祈禱がささげられるほか、旧約聖書である律法の書や預言書がヘブル語で朗読されました。このとき、朗読されたヘブル語を当時のユダヤ人は理解できなかったのです。なぜなら、当時の彼らの日常会話は共通語であつたギリシア語を話していましたので、朗読されたヘブル語の内容を、当時の公用語であるギリシア語で解説してもらわなくては理解できなかったのです。これが今日の説教の原型になったものです。いずれにしてもマルコ福音書が強調していることは、イエスが「教えた」ということです。ただ、その内容については何も書かれていません。

この教えの詳しい内容は分かりませんが、ただ律法学者とは違った権威ある新しい「教え」を説いたことだけがわかっているのです。そこで、マルコ福音書全体からその内容を推測するしかないわけですが、たとえばマルコ1章41節では『イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ……だれにも、何も話さないように気を付けなさい』と教え諭しています。また、6章34節では『イエスは……大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のようなありさまを深く憐れみ、いろいろと教え始められた』とあるように、イエスの教える行為がイエス自身の深い憐れみの心に起因していたことがわかります。これに対してマタイ福音書は山上の説教の結びの部分（7章28～29節）で、マルコ福音書と同じく、群衆はその教えが律法学者のようにではなく、権威ある者として教えられたことに非常に驚きます。その説教の中では『あなたがたも聞いているとおり、昔の人は……と命じられている。しかし、私は言うておく』（5章21～22節など）というかたちで、イエスの権威ある教えの「内容」を具体的に紹介しています。マ

¹ ルコ福音書がイエスの内面の思いに重点があるのとは対照的です。マタイ福音書で

はイエスの権威が一般的に理解しやすいうように内容重視になっていくのです。

しかし、イエスが見出し出した神の支配の現実が差し迫っていることを、イエスは「時は満ち、神の国は近づいた」というメッセージで言い表しました。

このことをもつと具体的に言うならば、これは神の国(天の国)という天国が近づいたわけではありません。神の国が近づいたというのは、ローマ皇帝が王座について世界を支配する世界が終わりを告げ、神が玉座について、神が支配する世界の実現が近づいたという意味なのです。ここでは従来のローマ帝国が支配する暴力的な社会の枠組みが壊されて、神の意志が前面に出てくる世界が実現するというのです。ですから、マルコ福音書は弟子の召命のあとに、ローマ帝国の支配の枠組みを破壊するように、安息日に汚れた霊に取りつかれた男を癒す記事が出現するのです。この悪霊払い、ローマ帝国の支配の下での異端者(たとえば精神の病に侵された者、身体に障がいをもつ者)はユダヤ教の社会的な共同体から排除されたままでもいいという当時の常識を覆す象徴的な行いでした。汚れた霊がイエスに対して『ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ』(24節)と拒絶の声を挙げていますが、それはこの悪霊払いの行為がローマ帝国による支配を崩壊させる端緒、きっかけとなるからです。水の一滴から岩を砕く道がひらけてくるのです。ただ、一般民衆はローマ帝国の政治的支配によって根本的に抑圧されていても、自分たちが自分たちよりも弱い存在の異端者を排除していることには気づいていないのです。このことに気づかないと、この世の矛盾を打ち破ろうとする憐れみに満ちた神の御旨が見えてこないのです。

しかし、イエスはこのタブーに挑みます。だから、権威ある者として深い憐れみの心を持ちながら、悪霊払いをし、多くの病人を癒すのです。当時のユダヤ教社会は悪霊に憑かれた人や病人を排除しています。悪霊に憑かれた人や病気の人たちを社会は排除しているのですが、イエスはその人たちを癒すことで、ローマ帝国の支配におもねっているユダヤ教社会の現状を批判しているのです。マルコ福音書ではその後も病人の癒し、重い皮膚病を患っている人の癒し、中風の人の癒し、手の萎えた人の癒しと、ずっと癒しの記事が続きます。そして、イエスは安息日に麦の穂を摘む律法違反も行ってしまします。そもそも本日のテキストも安息日違反の行為なのですが、これらの行為をするイエスには、他人や力ある存在に縛られないで自由に行動できる権威が備わっているのです。

最近、個人で宇宙に行ってきた元ZOZOTOWNの社長・前澤友作氏の話は、あまりニュースで取り上げられませんでした。お金持ちの道楽とみなされたのでしょう。彼が2019年に自分のYouTubeのチャンネルで1000億円を通帳に記帳する場面を撮ったものを投稿しました。単に1000億円を記帳した動画で、銀行のATMでのボタン操作と記帳した金額を眺めるだけの動画です。ところが、その動画の視聴回数は数日で100万回を超え、インターネットやテレビ番組で賛否両論の議論が噴出しました。富のひけらかしは下品ではないかというのが批判の主な理由でした。しかし、前澤氏は動画の投稿で反論します。「お金持たせてもらった人間の責務。誰かがやらないと、社会に刺激がなくなるし、夢もなくなるし、文化継承もされないし、経済も回らない」というコメントを出しました。

前澤氏は、富への欲望を刺激することが富む者の責務だと言っているように思われます。それは社会に夢を与えることであり、経済を回すことであり、文化でさえあると主張したのです。実際、1000億円というお金は、個人が獲得する金額としては破格です。動画を見て『自分も同じような金持ちになりたい』と思った人もいたことでしょう。自分もそうなりたいと思わないまでも、『お金を持つことへの羨望』を喚起するには十分な効果があったと思います。前澤氏の投稿は、羨望を集めることによって、「富の幻想」を強化する機能を果たしたことはまちがい

ありません。

それと同時に、彼が体現していることは、「最も少ない労働で、最も多くの利益を出すこと」、「最も少ない努力で、最も大きな成果を得ること」を最高善とする思想でした。それが賢い生き方をしている人間であるという考え方なのかもしれません。けれども、前澤氏が宇宙に行くために今回100億円を支払ったというのですが、もし、そのお金を別の分野の人たちに贈与したとしたら、もっと違った反応になったと思います。生死の境目で生きている地球上の人たちは沢山います。先日もアフガニスタンでイスラム原理主義の政権から逃れて難民キャンプで生死の境目で生きている人たちのことが報道されましたが、いま世界の人道支援者たちはアフガニスタンの政権の行方を見極めるために支援を控えているとのことでした。そのために、食事にも事欠く人々がたくさんいるというのです。たとえば、それらの人たちに、100億円分の食糧や医薬品を贈与することもできたからです。

私は前澤氏の宇宙旅行を批判しているわけではありません。先週の説教で、この世の重荷を背負うことで、イエスが唱えた神の支配の一端が見えてくると申しました。この世の重荷を担うということは、何も、自分のお金を困っている人に贈与することだと言っているわけではありません。そういう方法もあるでしょうし、この世の課題を広く知らしめるジャーナリズムの活動もあるでしょう。イエスがこの世の重荷を背負って十字架への道を歩み始めたのは、この世の課題に対して自分が関係しているという意識があったからです。この世の課題に自分も関わっているという意識がなければ、責任性の意識は生まれません。ライブドアの前の社長の堀江氏も宇宙へいくロケットの開発を北海道で行っています。一人とも、この世でたくさんのお金を稼いで、この世の事柄ではない宇宙に強い関心を向けていることが共通しているのは偶然ではないでしょう。どちらにしても自己実現の方向が地上のことでなくて宇宙に向いてしまっていることが象徴的です。自分の関心が他者に向かないのです。自分がこの世で他人ができないことを何か成し遂げたい思いに執着しているように見えます。でも、イエスが見た神の国はこういう自己実現の方向性とは真逆です。悪霊に取りつかれている男を癒すことは、イエス自身がユダヤ人の同胞から非難を受けることにつながります。道端で困っている人を助けることが単なる人助けに終わらないで、自分を困った状況に追い込むことがわかつているにもかかわらず、癒しの業を行うことは、イエスがこの悪霊にとりつかれている男の重荷に対して自分にもその責任の一端があるという意識があったからです。会堂での礼拝のある段階で、その男が会堂に乱入してきたのでしょうか。普段から礼拝に出席できないということとは、宗教的にも社会的にも人間の共同体からはじかれていくということです。しかし、そのような人が誰よりも先にイエスの深い憐れみに接し、具体的にイエスによる癒しの恩恵にあずかるのです。

マルコ福音書では、この男を皮切りに幾人もの「汚れた霊に取りつかれた」男女が登場します。1章34節、3章11節、5章2節（ゲラサ人のいやし）、7章25節（シリアフェニキアの女の幼い娘）、9章25節（ものを言わせず、耳も聞こえさせない霊）と続きます。イエスは汚れた霊に対して権威をもって命じられると、汚れた霊もその言うことを聴く（1章27節）のです。その後もイエスは『悪霊にものを言うことをお許しにならなかつた』（1章34節）し、『汚れた霊、この人から出ていけ』（5章8節）、『私の命令だ、この子から出ていけ。二度とこの子の中に入るな』（9章25節）と、イエスは次々と悪霊を排除していきます。しかし、悪霊の排除は。同時に神の支配の現実化であり、ローマ帝国の支配に風穴をあける行為でもあったのです。権威ある新しい教えとは、人を排除する社会システムの転換を促す行為でもあり、神の国の到来を人々に知らせる象徴的行為でもあったのです。